

# 重要文化財旧三河島污水処分場唧筒場施設の 復元・保存工事終了

## 1 旧三河島污水処分場の歴史

三河島水再生センター(東京都荒川区)の前身である旧三河島污水処分場は「近代下水道の発祥の地」であり、日本最初の下水処理施設として大正11年(1922)に運用を開始しました。本施設の稼働により、汚水は生物処理である散水ろ床法によって浄化、放流されることとなり、東京の下水処理は近代的な都市にふさわしいものとなりました。唧筒場施設は、平成11年に休止するまで77年間稼働を続けた歴史的な建造物です。阻水扉室、沈砂池などの一連の構造物が、旧態を保持しつつまとめて残っており、近代下水道の構成を知る上で大変重要な施設です。その高い歴史的価値が認められ、平成19年、国の重要文化財(建造物)に指定されました。

## 2 重要文化財の復元・保存

東京都下水道局では、施設の一般公開に向けて平成22年度から平成24年度まで復元・保存工事を行いました。工事では、『重要文化財(建造物)旧三河島污水処分場唧筒場施設保存活用計画』(東京都下水道局)に基づき、歴史的価値を損なわないようにできる限り当時の技術を活用しました。また、耐震性を確保しつつ、公開時のバリアフリー化を図るため、耐震補強を様々な方法で比較検討し、外観や見栄えを損ねない最適な工法で実施するとともに、ポンプ室内部を見学者が不自由なく往来できるように整備しました。

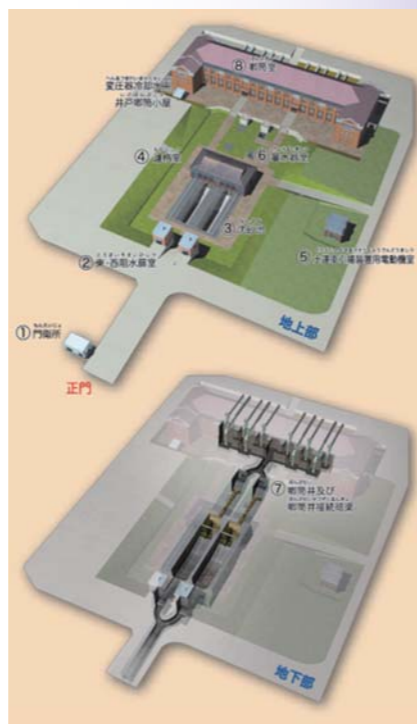
## 3 一般公開

本施設は平成25年4月から一般公開を開始しました。公開ルートは下水処理の流れに沿って、阻水扉室⇒沈砂池⇒ろ格室⇒量水器室(ヴェンチュリー管)⇒ポンプ室とし、さらに流入暗きよ等、通常見ることのできない地下部分への導線も確保することで下水処理システムの理解がしやすいように工夫しました。



## 4 重要文化財の各施設

- ①門衛所・正門  
表玄関として、污水処分場施設と同時期に建設されました。その後、正門は改築されましたが、門衛所は現存しています。
- ②東・西阻水扉室  
東・西に各1棟あり、メンテナンス等のために、下水の流れを一時的に止める扉が地下にあります。
- ③東・西沈砂池  
下水を池の中でゆっくり流し、下水中の土砂類を沈殿させて取り除きます。
- ④ろ格室  
下水中に浮いたゴミを地下のスクリーンで取り除きます。
- ⑤土運車引揚用(インクライン)電動機室  
下水から取り除いたゴミを積んだトロッコを坂の上まで引き上げる機械が置かれています。
- ⑥量水器室  
水量を測るヴェンチュリー管という施設が地下にあります。
- ⑦唧筒井及び接続暗渠  
ここで東西の水の流れが合流します。その後、ポンプで水を地上にくみ上げるため、10基のポンプ井に分かれます。今回の整備で地下内部を見学できます。
- ⑧唧筒室  
下水を地下からくみ上げるポンプ機械があります。



## 編集後記

今回は、8月に重要文化財に指定された旧前田家本邸について特集しました。10月から始まる「東京文化財ウィーク2013」でもイベントを行います。是非、この機会に足をお運びいただければと思います。文化の秋、「東京文化財ウィーク2013」のガイドブックを片手にお近くの文化財を訪れてみてはいかがでしょうか。



# 東京の文化財

洋館玄関ホール

## 目次

重要文化財(建造物)「旧前田家本邸」	1~3
東京文化財ウィーク2013が始まります!	4~5
文化財を生かす(港区・武蔵野市)	6~7
重要文化財旧三河島污水処分場唧筒場施設の復元・保存工事終了	8



## 重要文化財(建造物)「旧前田家本邸」

目黒区の北端の駒場の地、江戸時代には将軍家の鷹場が設けられ、後に東京帝国大学農学部の農地となっていたその場所に、旧加賀藩主前田家が昭和3年から5年にかけて建設した本邸が残されています。平成25年8月7日、「旧前田家本邸」及び「尊経閣文庫」として国の重要文化財に指定されました。



▶洋館外観



## 本郷本邸から駒場本邸へ

加賀藩前田家は、織田信長に仕えて功績を上げ大名に列せられた初代前田利家に始まり、豊臣政権下では徳川家康に並ぶ地位を得て加賀国を与えられ、江戸時代初期には加賀、能登、越中の3か国に119万石を有した大大名家です。

前田家は5代綱紀の時、現在の和田倉門外にあった上屋敷が火災により焼失した明暦3年(1657)以降、代々本郷邸を上屋敷としていました。

明治維新後、先代利嗣が逝去したため16代利為は弱冠16歳で当主を継ぎ、家政を司るに当たり「本郷邸は市内雑踏、邸宅地としては繁華に過ぎ、かつ建物も歴大にして今日の生活には適せず」という考えを持つようになりました。大正13年(1924)、利為は政府の関東大震災復興計画に関連して東京帝国大学から前田家本郷邸と駒場農学部土地との交換の打診を受け入れ、本邸を駒場に移すことにしました。

大正時代末の駒場の地は東京帝国大学農学部の敷地と代々木演習林が広がっており、合わせて5万坪余りの土地と本郷本邸の土地約1万2千坪及び建物とが等価交換されました。大正15年(1926)7月には駒場本邸のための地鎮祭が執り行われ、建設工事が着手されました。設計には当時東京帝国大学教授の塚本靖、技師として洋館には宮内省内匠寮工務課の高橋禎太郎、和館には帝室技芸員の佐々木岩次郎と佐々木孝之助、茶室には3代目木村清兵衛、また、工事施工者には竹中工務店初代社長の竹中藤右衛門が名を連ねています。一方、「暖房工事設計を竹村工学博士に、電気工事設計を大山工学士にそれぞれ依頼」と記録があり、当時の日本で最新の設備を整えた設計がなされました。また、造園設計を同じく東京帝国大学農学部教授の原熙が手掛けています。



育徳会閲覧所北面

## 駒場本邸の配置

駒場本邸の敷地は、11,290坪(37,320平方メートル)、周囲に使用人たちが住まう家舎で取り囲み、南側に芝生の円庭を配し中央に洋館、その東に和館と日本庭園、さらに東側に煎茶席三華亭(現在は成巽閣に移築)と中華風の庭園とする計画となりました。また、敷地北側には尊経閣文庫、事務棟、車庫、温室などが配されました。建設工事中にイギリス赴任先の利為から和館は贅沢に過ぎるのではないかと連絡もありましたが、前田家の評議会が外国人来賓をもてなす上でも前田家として和館は必要と主張し、本郷本邸の建築部材をできるだけ再利用することとして工事が続行されたというエピソードも残されています。

昭和3年に事務棟と尊経閣文庫が竣工、昭和4年に洋館が、昭和5年に和館が竣工しました。建物とともに建具、調度品や庭木なども整備され、利為と菊子夫人がイギリスから子どもたちとともに帰国し、この駒場本邸に入るのは昭和5年9月のこととなります。

次に重要文化財に指定された主な建物を順に紹介していきます。



和館 門・堀



和館外観

## 和館

和館へは建物北側の割竹打ちの連子堀に沿って進み、銅板葺の屋根を載せた薬医門をくぐると、重厚な玄関が現れます。和館は木造2階建、建築面積約350平方メートル、延床面積約460平方メートル、屋根は棧瓦葺と銅板葺で複雑に構成され、2階に設けられた楼閣風の宝形屋根の銅板葺が外観を特徴付けています。1階南側には、21畳の御客間と17畳半の御次之間が続き間となっています。御客間は格式のある床、違い棚、付書院に棹縁天井や箒欄間などを備え、主室周囲は畳廊下や入側、縁側で囲まれ、日本庭園を臨みます。この主室の西側に茶室、東側には小座敷が設けられています。また、本郷邸から移したとされる橋本雅邦作の杉戸絵も残されています。

2階は南側の15畳の御居間が中心で床の間や違い棚が調えられていますが、天井には市松の板張り格天井、壁面には丸窓を設けるなど、やや数寄屋風の造りとなっています。



和館1階 御次之間

なお、2階への階段踊り場に設けられた洋風便所と浴室は建築当初のもので、当時の最先端な設備が目をはききます(和館2階は一般公開していません)。

## 洋館

洋館は鉄筋コンクリート造、地上2階地下1階建、建築面積約1,130平方メートル、延床面積2,930平方メートルで、屋根は銅板葺、外壁を薄茶色のスクラッチタイル張りに白い大華石を胴蛇腹やパラペットにアクセントとして配し、扁平アーチのデザインを基調とするイギリス、チューダー様式の建物です。建物西側には玄関ポーチを張り出し、南側1階にはテラス、2階にベランダを設けています。

1階には応接室、サロン、大小の客間や食堂など接客を考慮した表向きの部屋があり、2階には書斎をはじめ家族の居室や寝室など、内向きの部屋が配されています。建物北側は使用人たちの事務室や控室等が配され、地下は厨房やボイラー室、屋根裏は倉庫やナースリーとなっていました。

1階の表向きの部屋にはそれぞれマンツルピースが設置され、腰壁部のラジエーターボックスのグリルやシャンデリアとともに部屋に典雅さを添えています。優雅に湾曲する階段手摺りとステンドグラス、階段下のイングルヌックは見どころの一つです。



洋館寝室



洋館書斎

## 現在の旧前田家本邸

戦時中昭和17年に利為がボルネオで戦死した後、この駒場本邸は中島飛行機製作所の手に渡り、戦後は連合軍に接収されました。返還後は国と東京都が分割所有することになり、現在は目黒区立駒場公園となって公園としては区が、洋館のみが管理しています。尊経閣文庫は建設当時のまま残され現在は公益財団法人前田育徳会が所有しています。

こうした紆余曲折の歴史を経て、旧前田家本邸の邸宅が広大な敷地とともに、ほぼそのままの形で残されているのはとても珍しく、当時の華族の生活をうかがい知ることができる貴重な文化財です。大都市東京の喧騒から逃れ、静かな時の流れる大邸宅で日本の近代の文化と歴史を感じてみてはいかがでしょうか。

■旧前田侯爵邸(洋館)は、以下の日程で一般に公開しています。

場所: 目黒区駒場4-3-55 駒場公園内 公開日: 水～日曜・祝日(年末年始を除く) 公開時間: 9:00～16:30(駒場公園の閉園時間は16:30ですので御注意ください) 交通: 京王井の頭線「駒場東大前」駅(西口)下車徒歩12分/小田急線「東北沢」駅又は「代々木上原」駅下車徒歩13分/「渋谷」駅から東急バス(幡ヶ谷行き)「代々木上原」下車徒歩3分 その他: 旧前田侯爵邸ガイドボランティアの会が建物、歴史についてガイドを無料で行っています。活動日: 木～土曜・祝日 11:00～14:00～



和館側渡廊下(奥の階段から洋館)



和館 橋本雅邦作杉戸絵





# 東京文化財ウィークとは

東京文化財ウィークは、国の「文化財保護強調週間」に合わせて、都内各地にある文化財を一斉に公開するとともに、文化財に関連した企画事業もこの時期に集中的に実施しようとするものです。9月下旬に配布予定の文化財ウィークのガイドブックには、文化財ウィークに参加している公開文化財と企画事業が掲載されています。

また、現地では写真付きポストカードの形をした文化財に関する解説カードも無料で配布しています。解説カードは現地等でしか手に入れることができませんので、文化財を訪れた際に集めてみてはいかがでしょうか。

この機会に是非ガイドブックを見ながら文化財めぐりをお楽しみください。

TOKYO HERITAGE WEEK 2013

# 東京文化財ウィーク2013が始まります！



## ガイドブックについて

文化財ウィークに参加する公開文化財、企画事業の情報が全て掲載されたガイドブック(冊子)を発行します。都庁内の観光案内所や、区市町村教育委員会の文化財担当の窓口、区市町村立郷土博物館、ガイドステーションを中心に無料で配布しています。

今年度のガイドブックは一年を通じて使用できる「通年公開編」と文化財ウィーク期間限定で行われる企画をまとめた「特別公開・企画事業編」の2冊に分かれています。お取り忘れのないように御注意ください。

\*年間の公開情報については平成25年9月現在の情報になります。最新の情報については改めて御確認の上、お出かけください。

### ・通年公開編

一年を通じて使用できるガイドブックです。巻頭特集として「旧江戸城を歩いてみませんか」「再発見！多摩の文化財～電車を使って文化財めぐり～」を掲載しています。詳細は右ページを御覧ください。

### ・特別公開・企画事業編

10/26(土)～11/4(月・休)の文化財ウィーク期間に限り公開される特別公開、10月・11月に開催される企画事業を掲載しています。旧前田侯爵邸での催しや特別企画など、もりだくさんの内容となっています。詳細は右ページを御覧ください。



## 新規参加の文化財

今年度から新しく文化財ウィークに参加することになった文化財の一部を御紹介します。

### ・旧東京皇室博物館本館(重要文化財(建造物))

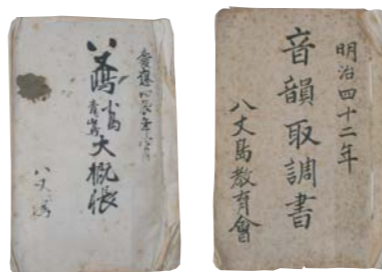
昭和13年に開館した建築面積にして6,600㎡もある大建築です。渡辺仁の原案で、宮内省内匠寮が実施に当たりました。和風を基調とした完成度の高い意匠を持ち、日本の近代建築の到達点を示す作品の一つとして高い価値があります。



東京国立博物館本館

### ・八丈島民政資料(都指定有形文化財(古文書))

旧八丈島島役所に伝来する文献資料で、流人に関する記録や編纂物などです。近世以降の八丈島の歴史や、離島村落の実態を把握する上で重要な史料群です。



都指定有形文化財(古文書)八丈島民政資料



# 特集記事



文化財ウィークに合わせて、昨年度に引き続き区部と多摩部でそれぞれ特集記事を組みました。こちらは、文化財ウィーク期間に限らず、御自身でめぐって楽しむことができるコースとなっています。是非とも都内の文化財をお楽しみください。

なお、特集記事は、通年公開編のガイドブックで紹介しております。



現在の中雀門



「本丸重箱櫓中ノ渡門図」  
※重要文化財 旧江戸城写真帖  
東京国立博物館蔵

明治4年(1871)に撮影された江戸城古写真と現在の江戸城を見比べてみるのも面白いです。古写真は別冊に掲載しています。



## 旧前田侯爵邸での催し H25.8.7 重要文化財に指定されました！

平成25年8月7日に重要文化財に指定されたばかりの旧前田侯爵邸においても文化財ウィーク期間中様々なイベントを行います。

### ・壁泉 渡り廊下 特別ガイド

主催 旧前田侯爵邸ガイドボランティアの会  
普段公開していない渡り廊下や内庭、壁泉などをガイド付きで御案内します。この機会に御覧ください。

### ・『文化遺産とまち、ひと、復興』展

主催 NPO法人粋なまちづくり倶楽部  
NPO法人歴史都市研究会  
(一社)気仙沼風待ち復興検討会

東日本大震災で被災した宮城県各地の文化遺産の復興状況をパネル展示し、文化遺産が地域の復興に果たしている役割を伝えます。

### ・目黒区文化財めぐり(駒場地域)

主催 目黒区教育委員会事務局生涯学習課文化財係  
旧前田侯爵邸の洋館、和館ほか駒場地域の文化財を徒歩でめぐります。



## 特別企画

主催 東京都教育委員会

今年も以下のテーマで視覚・聴覚障害者社会教養講座を開催します。

・聴覚障害者社会教養講座 「江戸城と江戸の町～文化財が教えてくれること」

・晴眼者とともに学ぶ視覚障害者教養講座  
「縄文時代を講演と体験で学ぶ  
～縄文時代の生活に触れよう、勾玉のアクセサリーを作ろう！～」

詳細はガイドブックの特別公開・企画事業編を御覧ください。



日比谷図書文化館常設展示室

### ・旧江戸城を歩いてみませんか

かつて江戸の中心だった江戸城。今回は、この旧江戸城を2時間程度でめぐることのできるコースを御紹介します。また、文化財ウィークに合わせて、東京国立博物館、千代田区立日比谷図書文化館、東京都立中央図書館において、江戸城関連の講演会や企画展など様々な企画が行われます。この機会に江戸城の魅力をたっぷり味わってみてください。

また、こちらについては、より詳細な内容を記載した別冊版も配布します。あわせてこちらを御覧ください。

### ・再発見！多摩の文化財 ～電車を使って文化財めぐり～

今年が多摩市制開始120周年！ということで、電車を使ってめぐることのできる多摩地区の文化財を御紹介します。

今回取り上げた路線は多摩モノレール、西武国分寺線、JR青梅線の3路線です。また、御紹介している文化財は全て駅から徒歩20分以内で行くことができます。



玉川上水(西武国分寺線編より)



## ガイドステーション

区市町村立の郷土博物館を中心にガイドステーションが設置され、企画事業などの情報提供やガイドブックの配布を行いますので、是非御利用ください(ガイドステーションの設置場所はガイドブックに掲載予定です)。

問合せ先  
東京都教育庁地域教育支援部管理課  
電話 03-5320-6862



# 旧協働会館の活用検討

文化財を生かす(港区)

名称:旧協働会館  
竣工年:昭和11年  
所在地:港区芝浦1-11-16  
(JR田町駅・地下鉄三田駅 徒歩10分)  
別:港区指定有形文化財(建造物)  
※平成25年現在 内部非公開

## 建物の特徴

旧協働会館は、昭和11年に大工棟梁酒井久五郎により、芝浦花柳界の見番建築として建設されました。この建物は、木造総2階建て、延床面積がおよそ440㎡で、棧瓦葺の入母屋造りの屋根に、ささらこ下見板張りの外壁を持った和風建築です。間口は9m、奥行き18m、後方が8mほど張り出したL字型平面で、1階が芸妓取次ぎのための事務室、2階が「百畳敷き」と呼ばれる檜板敷きの舞台が設置された演舞室となっています。

見番として使われていた期間は短く、戦中早い時期に芝浦花柳界は疎開し、代わって昭和16年に開港した東京港の労働者用宿泊施設として使われるようになります。協働会館という名称は、その頃からのもので、閉鎖される平成12年まで宿泊施設として使われていました。2階の「百畳敷き」は周辺住民にも開放され、地域の住民にとっても親しみのある建物でした。



2階演舞室

## 保存・活用の背景

平成12年、協働会館の閉鎖と取り壊しが決定されると、住民や研究者等の間から保存・活用の強い要望が湧き起こります。この動向を重く見た東京都と港区は、協働会館の取扱い方について、様々な角度から検討を積み重ねました。その結果、港区が東京都から建物を譲り受け保存・活用に当たることとなり、平成20年、建物譲渡ならびに土

地の無償貸与の契約が都と区の間で取り交わされました。現在は、港区芝浦港南地区総合支所が、土地・建物の維持・管理に当たっています。

協働会館の建物は、東京に残された数少ない貴重な見番建築です。加えて協働会館が、地域の歴史の一コマを象徴的に伝える歴史的遺産であることから、港区教育委員会は平成21年、区の有形文化財(建造物)に指定しました。

併せて港区は、建物取得のもう一つの目的である活用について、専門家を交えた検討会を設置し、検討を開始しました。しかし、平成23年3月11日の東日本大震災により検討は中断を余儀なくされ、今日に至っています。

協働会館は、建物が使われなくなり10余年が経過し、この間に劣化が進行していることは想像に難くありません。今、建物の保存・活用の在り方を早急に策定することが求められています。

## 歴史的建造物の活用

港区は協働会館のほかにも、昭和13年竣工の旧公衆衛生院(旧国立保健医療科学院白金庁舎)を取得し、現在その保存・活用計画を策定しています。

近年、歴史的建造物の維持・管理の考え方は、従来の保存中心から、積極的な活用を目指す方向へとシフトしつつあります。歴史的建造物の活用機会の増加は、建造物に限らず、歴史的遺産を身近な存在とする上でも意義があります。



旧公衆衛生院外観

文化財を生かす(武蔵野市)

# 武蔵野市指定無形民俗文化財「むさしのばやし」



## 「むさしのばやし」の由来

武蔵野市指定無形民俗文化財である「むさしのばやし」は、文久2年(1862)に旧吉祥寺村の若者達を中心となって生まれたと言われています。旧吉祥寺村の八幡神社(現・武蔵野八幡宮)のお祭りを賑やかにするために四軒寺(月窓寺、連乗寺、光専寺、安養寺)周辺と本宿辺りの若者達が習い覚え、吉祥寺囃子として伝えられてきました。

吉祥寺村の若者達が初めて指導を受けた師匠は、当時阿佐ヶ谷辺りにいらっしゃった、田淵流(中間流)の流れを受け継いだ方で、藁束を叩きながら習ったと言われています。

明治20年(1887)頃は、多摩郡千歳村字舟橋(現・世田谷区千歳船橋)辺りに船橋流を広めた内海軍次郎氏という師匠がおり、吉祥寺囃子連中など周辺の若者達が好んで習ったと言われています。

明治中期以降、維持が危ぶまれた時期がありましたが、当時の村長であった池田八右衛門氏が宮世話人と相談し、補助金を村から支出することで窮地を脱し、存続することができたようです。

明治末期から大正にかけて、正月になると獅子舞や抵牾の踊りが村内を戸別に回り始めるようになり、見物人も多く集まり、祝儀や寄付等の収入も多く集まるようになりました。

大正末期、田無の柳沢に、速間船橋流を受け継ぎ、速間田無流(現・速間西林流)を編み出した笛の名人である西林源六氏という方がいました。昭和にかけて吉祥寺囃子連中は、速間田無流を伝えていた開祖西林源六氏、二代目西林三代松氏から指導を受けるようになります。

以上のように吉祥寺囃子連中は、田淵流(中間流)から速間船橋流へ、さらに速間田無流(現・速間西林流)へと三段階を経てきました。

昭和37年頃から、吉祥寺囃子連中は「武蔵野囃子吉祥寺囃子連中」と呼ばれるようになりました。そして昭和46年4月6日、武蔵野市は「武蔵野囃子(吉祥寺囃子)」を市技芸(現・武蔵野市指定無形民俗文化財)の第一号として指定しました。指定を契機に囃子の名称を「むさしのばやし」に、吉祥寺囃子連中は「むさしのばやし保存会」へと名称変更しました。

## 現在の主な活動内容

武蔵野市教育委員会は、江戸時代から続いている囃子を次の世代につなげていこうと、むさしのばやし保存会の協力を得て、昭和50年から子どもを対象とした「むさしのばやしチビッコ教室」を実施しています。練習の経験年数によってクラスを分け、4月から10月までの期間(夏休みを除く)で毎週練習を行っており、平成25年度で38期生を迎えます。また昭和60年から、成人向けの「むさしのばやし成人教室」を開き、成人会員の募集を始めました。

むさしのばやし保存会は、吉祥寺の祭り、武蔵野八幡宮例大祭などで公演活動を行っており、チビッコ教室、成人教室は毎年秋に行われる市民文化祭で発表会を行っています。

平成23年には、「むさしのばやし」生誕150周年、市指定無形民俗文化財指定40周年の記念式典を開催しました。

無形民俗文化財は無形だけに一度途絶えると、元のとおりに戻すことが難しく、その確認も困難となります。そのため、むさしのばやし保存会と武蔵野市は、この伝承が途絶えることなく次の世代に伝えていきたいという想いで活動を続けています。



むさしのばやしチビッコ教室

## 問合せ先

武蔵野市教育委員会教育部生涯学習スポーツ課  
TEL 0422-60-1902 FAX 0422-51-9269  
HPアドレス  
[http://www.city.musashino.lg.jp/shogaigakushu\\_koza/geijutsu\\_bunka/004280.html](http://www.city.musashino.lg.jp/shogaigakushu_koza/geijutsu_bunka/004280.html)